

讃留靈王伝説考 (2)

桂 孝 二

本稿 (1) の終りの方に (2) として、本稿に続くことを記したが、本稿を読まれる時、それを再読されるのも面倒と考え、ここに、簡畧に記すこととする。

本居宣長が「古事記伝」二十九 景行天皇の条のうちに、本伝説を記している。そのうちに、以下引用する九種の伝説中に見えないこともあるので、伝説について考察する時、ふたたび、その項を書き添えることとする。

また、この伝説は香川県発行「香川叢書」の第三巻の末に、九種の伝説が収められている。その名称を、同叢書の書き方に従って記しておく。

(1)	島田寺本	(亦一名 琴平本)	11頁
(2)	香西本	一卷 (無)	
(3)	豊平本	(又一名道隆寺本)	4.5頁
(4)	図師本	(但シ 南海通記本)	2頁
(5)	中尾本	(文章をかかげる時は「異本讃霊記」)	1.3頁
(6)	中山本	(但シ全讃史本)	2頁
(7)	増田本	(但シ三代物語……)	1.2頁
(8)	玉藻集本	(亦 讃岐大日記文)	1頁
(9)	秋山本	(但シ 西讃府史本)	0.7頁
(10)	讃陽綱目本	0.6頁

以上のように2は本文がないので九本が収められている。1の頁数が圧倒的に多いのであるが、サルレイ王伝説の後日談が長く続けているからで、サルレイ王伝説そのものはさほど長文ではない。さしあたり、1を取りあげて、他との違いなどを比較しつつ見てゆくこととする。漢文を読み下し文とし、口語文に改めることとする。

(1) 伝説の概略

(1) 讚留靈公胤記 (島田寺本)

神武天皇より十二代景行天皇の御代十三年癸巳の年、土佐国の奥海に大魚あり、其姿蝦の如しとある。その蝦のような大魚が、船舶を飲み、人肉を食し、南海諸国の年貢公物を覆没することをかぞえることができない。古今無双の朝敵である。そこで天皇は悪魚征伐のために官兵を遣わすが、すべて悪魚のために食われてしまう。そこで、天皇は小碓命 (倭健命) に悪魚征伐を命ずる。自分の子の霊子と呼ばれるものが年齢十五歳、強力の勇士でこれに命令を下されたいと申し、霊子が命を受けて僅か十四日にして土佐国に到着した。

(延喜式巻二十四の主計上によれば、土佐より調、庸等の租税を京都へ運ぶのに海路25日とある。土佐の国府までで、この場合は土佐のどこか明らかでないが、都は大和の国であったが、非常に速いことを言っている。)

倭建命が天皇の命により熊襲タケルを討ちに行ったのは、日本書紀によれば御年十六年である。古事記では、「この時に当りて、其髪を額 (ぬか) に結び給ひき」とある。崇峻紀に「年少兒、年十五、六の間、髪を額に束ね」とあるが、その年らしく記したわけである。そして、古事記では西征から大和へ帰ると、重ねて東征を命ぜられるが、紀では倭建命の西征出発は景行天皇即位27年、帰着は28年、そして40年に東征に出発されることとなっている。日本書紀では3人の妃との間に7人の御子を持ち、古事記では6人となっている。美夜受比売はキサキのうちにはいない。このようなことを考えると西征から直ちに東征に赴くというのは一種の文飾であって、日本書紀のように間をおくのが正しかろうと思う。この両者に見える御子の一人が建貝子王で讚岐における悪魚退治の主人公となる方でもあり、綾氏の祖ともなるのである。さて悪魚退治の話に戻る。但し景行天皇の御代23年は倭武命12歳である。この「讚留靈王公胤記」を書いた人は日本書紀、古事記を見ていないと断ぜられる。

さて、大魚は土佐海に居るばかりなので、霊子も土佐にとどまる。そして軍士たちは王を土止靈王と称し奉ったという。土左に止まられたので、こう呼んだというので、のちに讚留靈王と称した伏線である。

そして、悪魚は土佐から阿波の鳴戸の海に移る。そして翌年、24年正月一日西海に向い、三月一日、讃岐の樋戸海に移り栖み、船舶、官物を飲み、人肉を食らう。大槌島・小槌島、大崎鼻の間の海を通る船舶をねらうわけであろう。靈子は讃岐国へ移り軍船を作り、海に浮かべ一千人の官軍を集め、二十五年五月五日その舟に乗り大魚に向う。大魚は舟を飲みこんでしまう。軍兵らは魚胎内で、「酔い臥して」死体の如くなってしまう。靈子は「酔い臥すことなく、十日十夜を経て心は明朗、魚胎中において「火を出して之を焼く、大魚苦惱して遂に斃れる。」靈子は剣を以て肉を破り、胎中より出て、魚屍の上に乗り、福江の浦に漂い寄せたと言う。時に一童子があらわれて、瓶を持って水を献上する。靈子これを服すると味は美味で、甘露のようである。その水が「安庭の水」であることを聞き、水を飲んで魚胎中に酔臥している軍兵らにのませて「命活かしめよ」と言う。童子は水を瓶にくみ、魚屍のある所へ行き、胎中を割り破り、その水を酔臥せる官兵らに与え飲ますと、軍兵らは忽ち醒寤（さとりを開く意のようであるがここでは酔臥しおえこやしたのからさめた）ことを言うのであろう。

この一節が、神話を思わせる。①魚胎中で火を出すこと。②酔い伏すこと。③靈水のことの3が古伝説にも見えることで興味深い。以下そのことについて述べて行こう。

① 魚胎中で火を出すこと

これは不可能のこのようである。

柳田国男氏に「火の昔」という名著があって愛読したが、今手もとに見えないのが残念である。その書で火は最初は落雷からできた火を持ち帰って家で火種として常に保存し、用いたのであろうと記憶している。倉野憲司氏の『祝詞新講』では出雲大社で火をきり出す写真が掲載されていた。これも記憶で記すのであるが、板の上に穴があって、そこに細い棒をたて、向い会った二人の神職の人が紐で、その棒をくるくるまわして発火させる。それを火種として用いたのであろう。『古事記』で倭武命が相武の国でその国造にあざむかれて野に入り火攻めにあう。命は出発の途中、伊勢で姨（おば）倭比売命から草薙劍を賜わり、更に「急（とみ）の事あらば、このふくろの口を解くように言われた

その袋の口」を解くと「火打（ひうち）」が、その中にあったので、周囲の草を刈りはらい、自分の周囲の草を刈り払って、敵の火が自分に迫らないようにして、その火打で火を打出して、向火をつけて、火がこちらから敵の方へ行くようにして、その国造どもを切り倒したという。倉野憲司氏は岩波の古事記の補注で源氏物語の二例をあげて逆襲する意に使っている。岩波の『古語辞典』では、本例をあげ、つづけて「新選字鏡」の火打石の項の説明を記している。醍醐天皇の御代には珍らしくも無かったのであろうか。

さてこの「讃留靈王の物語で火を用いた」のは本稿ははじめの方の書名につけた番号によって記すと、

- (4) 「烈火（オキビ）を舟の中に蔵（カク）し置き」
- (5) 「火ヲ出シテ之ヲ焼ク」
- (7) 「猛火ヲ舟中に匿（カクシ）テ」

と合せて四本である。倭建命の火打を用いる例が一例も見えないのは、この伝説が後記するように倭建命の東征を受けた例が伊吹山の条などもあるが、この項では相模の国の個所をまねての火打石を用いたことにすればよかったと思うが、何しろ書紀も読んでいないらしいので無理であろう。なお、この話は香川の二女性によって口語化されている。

「さぬきの民話」（薄井八重子・昭46刊・香川県文学協議会刊）では「かねて用意の船底のしかけに火を放ちました」とある。かねて用意はよいが、どういう方法で「火を放つ」ったのか分らない。「讃岐の伝説」（昭51年刊・武田明、北条令子共著、ただしこの部分は北条令子さんの筆・角川書店刊）では「船のへさきに隠しておいた焼炭が潮水を沸騰させて」とされている。この焼炭を火種として干草か何か燃えやすいものをその上かけると可能なように思う。そういう手段をとらなければ沸騰する前に海水に消されるのではないかと心配である。沸騰した水でも焼水を消す力はあるようだ。いささか無理であると思うがともあれ二女史の苦心に敬意を表する。

(2) 酔ひ伏すこと

魚に呑みこまれると軍士らが気を失うこと、それを酔ひ伏す、をえこやすなど言っている。(1) (番号は諸本名をつけた時に記したもの)「軍兵等、魚胎ニ

酔臥シテ死体ノ如シ、而シテ猶存生ス。(3) 軍士皆其氣ニ触レテ而ウシテ酔死ス。(4) 官兵其ノ毒氣(アシキケ)ニ中(フ)レテ、胎中ニ酔臥(ヲエコヤセリ)(5) 靈子官士多ク魚胎ニ入り、酔臥スルコト死セルガ如シ。而ウシテ靈子独身心悩ムコトナシ。(6) 兵士八百人皆其氣ニ中(アタ)リ、而シテ死ス。(7) 八十人ノ者皆毒ニ触レテ、酔ヘルガ如ク、死スルガ如シ。(8) 靈子、官士魚胎ニ入りテ、暑キコト火ノ如シ。官士酔伏シテ、皆屍(シカバネ)ノ如シ。靈子独心正シク身建ナリ。而シテ劍ヲ以テ悪魚ヲ福江ノ浦ニ屠殺ス。実ニ五月五日ナリ。(9) 其ノ時、軍士或ハ噉食(噉ハクウノ意)セラレ、或ハ瘻毒セラレ、失命スルモノ多シ。(10) 大碓命ノ外皆毒氣ニ触レテ瘻死ス。

以上のうち(9)(10)のみは下文に記す八十場の靈王伝説を記さず多数の部下が死んでゆくことになっている。

なお倭建命伝説のうち、記・紀ともに見えるもので、東征伝説の終りの方に伊吹山の神(記)荒ぶる神(紀)を取りにいれます話がある。東征に下った時、伊勢神宮に仕えていた伯母倭姫命より、草薙劍と火打などの入った袋を賜わったことはすでに記したが、往路に尾張国でその国の祖、美夜受比売の入りまし、結婚しようかと思ったが、帰途のこととしようと思出し(古事記)、帰途、比売の許に立ち寄り、歌の応答ありて結婚する。そして、その草薙劍を美夜受比売の許に置いて伊服岐能山(伊吹山)の荒ぶる神を取りに幸行(い)れます。紀では、往路のことはなく、帰途、尾張連(尾張国造)の女官竇媛と結婚する。そして伊吹山に荒ぶる神のあることを聞き、草薙劍を置いて伊吹山に向う。宝劍を残して出発したことについては「熱田縁起」によれば「京へ帰ったたら、お前を迎えよう、この劍を宝とし、わが床守とせよ」という。命に仕えていた大伴建日臣がこの劍を止めてはいけない、伊吹山の暴悪神あり、劍氣にあらずんば何ぞ毒害を除かんというのを聞かず命は足で蹴殺してしまおうと言ひ、劍を留めて出発した」とある。事実譚のようでもあるし、草薙劍が熱田神宮に祭られる起源伝説のようでもある。ただし、倭武東征は、「荒ぶる神またまつろはぬ人ども(服従しない人たち)を言向け和平(やは)せという天皇の命を受けて出発したので、走水の海では妃弟橘比売の死によって「やは」した以外は命令のとおり実行して来たので、今は伊吹山の荒ぶる神を取り(殺し)に行か

れたのであるが、山の主神・紀では蛇（ヲロチ）記では白猪が出て来たのを神の使と見のがす。記では山の神は大氷雨を零らせて倭建命を打ち惑わす。（岩波の文学大系頭注では、正気を失わしめた）紀では山の神は水を零らせ、峯は霧り、谷は暗くなり行く路が分らない。山の下の方の泉のほとりにまして、その水を飲んで醒めたとある。記はようやく玉倉部の清水に到りて息（いこ）いなさった時、御心が徐々に醒めた、そこでその清水を、紀・紀ともに居醒（いさめ）の清水、居醒の泉と言うとある。つまり、倭建命は酔臥す状態であったのであろう。

霊泉伝説ではないが、神武東征の折、熊野に於て、記と紀と事情は異なるが、神武とその軍勢が「遠延て伏しき」（記）「庠（を）えぬ」（紀）という状態になる場面がある。この時は高天原の天照大神の御心で、武御雷神の考えで、自分がその国を平げた時の剣を下したらよいと言い、その剣を高倉下の庫におとし入れる。「高倉下一ふりの横刀（たち）を持ちて、天つ神の御子（神武天皇のこと）の臥したまへる所に到りて献りし時、天つ神の御子は忽ち寝（さ）めて「長く寝つるかも」とおっしゃり、「その横刀を受け取り給ひし時、その熊野の荒ぶる神、皆おのづから切り仆（たお）されき。ここにその惑（を）え伏せる御軍、悉（ことごと）に寝め起きき」とある。霊水伝説ではなく、高天原の横刀であるが、山神の毒気から醒め、回復するのである。書紀の方は、熊の件以外は同じである。これは霊泉伝説はないが、霊剣の威力で、結果は、ほぼ同じであるのでついでに記しておく。

（2） 霊水伝説について

(1) の「讚留靈王公胤記」によれば、さきに記したように王は魚胎にあって何も何事もなく退治したわけであるが、(3) 豊原本では「靈王之ヲ飲メバ酔心頓チ醒ム」とあり④図師本では「ヤガテ飲ミ給フニ性心（ココロ）スクスクシクナリタマヘバ」(5) 中尾本「瓶ノ水ヲ靈子ニ捧グ、其水美味ニシテ甘露ノ如シ、身心清潔」などとあるのは王が酔臥していないにしても、気分がよくなかったことがわかる。

これは霊水伝説で、これを読むと浮んでくるのはヤマトタケル伊吹山の神を

取りに（殺すの意）にゆく時の古事記・日本書紀の伝えである。倭建命は、伊服岐（伊吹）山の荒ぶる神を取り（殺し）に出発なさる時、「この山の神は素手で真正面から殺そうとおっしゃって、その山に登ってゆく時、白い猪に逢うが、この白猪は山の荒ぶる神の使いである。帰りに殺してやろうとおっしゃって登って行ったが、実はそれが伊吹山の荒ぶる神であって、大水雨を降らして、倭建命の正気を失わせた。書紀では「失意如酔（心あわてて酔うたようである）」と記している。倭建命は山を下って玉倉部の清泉（しみづ）に至って、息（いこ）いなさきった時意識を回復された。（書紀）では、水を飲まれたことを記している。そこでその清水を居寝（キサメノ）清水と謂う」とある。

また、神武天皇が九州より大和へ入ろうとして失敗、熊野から大和へはいろいろとなさって「熊野村に到りましし時、大熊ほのかに出で入りて即ち失せき。ここに神倭伊波礼毘古命（神武天皇のおんこと）にはかに遠延為（をえま）し、また御軍（みいくさ、軍勢のこと）も皆遠延て伏しき」と日本書紀にある。古事記も事情は異なるが、やはり「瘁（を）えぬ」とある。この時天照大神が高天原でこのことをお知りになり、簡畧にするが、結局、武雍雷神（タケミカツチノカミ）が、自分が国を平げた剣を高倉下（タカクラジ）の庫（クラ）の中へ置こう、それを天孫に奉れと高倉下に言う。夢の中の教えによって庫をあけて見ると剣が庫の底板に立っている。それを献上すると、天皇は眠りから寝めなさった時、その熊野の荒ぶる神おのずから皆切り殺された。そして、をえふしていた御軍悉く寝めた。とある。このをえた理由がはっきりしないが、こういうことである。讃留霊王物語の悪魚によって軍卒らが「をえふした話」と同類の話で、古代人はこういうことを信じたのであろう。至るところに荒ぶる神がいて人間に害を加えたと考えたのであろう。

(3) 伝説とその現地と

讃留霊王伝説の「酔臥す」伝説を語っているうちに、倭建命の同様の伝説、そして霊泉でなく、霊剣によって「をえ伏した」のが回復した伝説に話が広がったが、こういうたぐいの伝説は数多いと思う。本稿の悪魚退治に伴うだけの伝説でないことを語ろうとしたのが前節の末尾の部分である。

讃留霊王伝説で「酔臥」した人々を回復させた霊泉は、今日の「八十場」の霊泉であろうが本伝説の伝えではまことにいろいろの字があてられている。本稿冒頭に記した諸本によって記すところなる。

- (1) 安庭水 (3) 八十蘇 (4) 休庭水 (5) 八十甍水
(6) 八百蘇波 (7) 八十蘇水 (8) 安場水

今日は八十場水とふつう言っている。夏のころは「ところてん」が名産となっている。山から流れおちる水を小さな池にためてところてんをひやすわけである。かって讃岐へ流された崇徳院の御遺骸の処置を都へ問いあわす時、この清水におつけしたという伝承がある。地名のはじまりはどの字が正しいか、はっきりと言にくい、山の南側で休場ぐらいが適当な気がする。今日では「八十場」がふつうの書き方となっている。

悪魚を埋めて祭ったところ（当時、仏教伝来以前であるから祭の字を用いたのであるが）魚御堂と云う小さな詞が残っている。旧制女子師範の一番南のところの南側にプールがあって、海岸の松らしいのが何本かあり、そのプールの西側に小さなお堂があって、それが魚御堂だと云われていた。そのころそのへんまで海であったのである。）現在坂出高校であるが、10年ほど以前は残されていて風情ある地であった。

また、坂出に江口、江尻の地があって、打ちあげられた大きな悪魚の口と尻から名づけられたという。岩波大典文学大系「菅家文章菅家後集」に当時の国府附近図というのがあるが国鉄沿線北、東は高屋神社の近くまで海であろうということで、そういうことから、江尻、江口を考えるべきであろう。

(4) 讃留霊王は誰か

悪魚退治の主人公を倭建命とし、その御子とし、あるいは神櫛王を考えたりする説があるが、これは倭建命の御子武卵王と考えるべきである。年齢のことを考えると倭建命でもさきに記したように無理なので、そういうことは、今、問題からのけて考える。讃留霊王は讃岐にとどまって、綾氏として栄えるのであるから倭建命ではないことは明らかである。倭建命の兄大碓命とする伝えもあるが（讃陽綱目）大碓命は讃岐と無関係で景行四十年美濃國に封ぜられてい

る（紀景行四十年）景行の皇子神櫛王は讃岐国造に任せられ、西讃岐に栄えている。そして倭建命の御子に武卵王があり、母は吉備穴戸武媛とある。また讃岐綾君の祖とある。以上日本書紀による。又古事記の倭建命の御子たちについての条に大吉備建比売を娶して生みませる御子建貝子王とあるのである。そして建貝子王は讃岐綾君と他の四氏の祖となっている。

この貝子について古事紀伝では「名の義、卵或は蠶などに由ありしか、」書紀には吉備武彦之女、吉備穴戸武媛、武殼王と十城別君とを生むとあり〔殼ノ字、今ノ本に殼と作（カケ）るは誤なり、即次に武殼と書けるにて殼なること著し、旧事記に別に武養蠶ノ命と云をも挙げたるも、別には非ず、此ノ御名の字の異なるなり、そて殼ノ字は、字書に卵甲と注せる意を以て、加比古に用ひたるなり（以下略）〕と記している。

日本書紀で〔武殼王〕とあり古事記で〔武卵王〕とあるが、ともにタケカヒコ王と読むことを宣長は説明し、字殼を使っている本はマチガイであると言っているのである。

そこで私は考えるのであるが、武卵王の名で中心となるのは卵一字で、他は添えたものである。卵というと、周囲を包まれたもので、瓜子姫の瓜、桃太郎の桃、かぐや姫の竹の中にあることなどが連想される。

周囲を包まれているムロについて20年前に考察したことがあるが、^(注)この武貝子王・武卵王も神的な存在であったろう。従って、この悪魚を退治した武敷王も古い伝承で神的な存在であったかと思われる。

この武卵王の悪魚退治伝説を歴史的事実と考えないで、讃岐豪族綾君の先祖譚と考えているが、その英雄を中央貴族の倭建命、この方も実在的でなく、中央政府の作りあげた英雄であろうと筆者は考えているが、中央政府の地方開拓、中央政府拡張の精神から認めたものではあるまいか。

綾氏という名前は綾織物に従事する人々の統率者であったのであるまいか。延喜式の見方もよく知らないのであるが、その主計上の諸国の調のところを見ると、讃岐國は二窠綾十二疋。七窠綾、小鸚鵡綾各八疋。薔薇綾四疋。三窠綾五疋と綾織物であろうが、計37疋と綾織物を取めるようだ。綾について見渡してみると、讃岐より多いのは遠江口182疋。伊勢42疋の2国で、尾張23疋、参

河20疋。駿河19疋。伊豆6疋。相模18疋。近江32疋。越前8疋。加賀6疋。能登3疋。丹波17疋。丹後15疋。但馬29疋。播磨16疋。安芸28疋。紀伊32疋。阿波12疋。伊予26疋。という有様であった。

見落としがなければ香川は遠江・伊豆について第三位であった。せまい讃岐の一部でこれだけの生産を綾氏の勢力範囲でやりとげたのであろう。また、そのうちの阿野一郡で熬塩を輸すと小字で調の最後に書きそえてあった。普通の塩と違って上等の塩であったのだろう。(注 香川大学教育学部研究報告第1部第6号(昭和30年9月刊)「ヤマトタケルとイヅモタケル」)

綾氏の勢力範囲

綾氏の根拠地は悪魚退治の伝説の地、坂出であろうが、次第に南下して行ったらしく陶村に猿王神社とその古墳とがある。古い明治時代の地図(明治二十四年測量歩兵第十二連隊)によれば、そのあたりを御社宮と書いてある。また、香川県神社誌によれば宇多郡坂本村に村社神山神社があり、その境外末社として讃王神社がある。また、法敷寺村に讃留霊王の古墳が存している。同村々史によれば前方後円古墳が写真に写されている。その後円部に讃留霊王神社が祭られている。一方香川郡の方へも延びたらしく、高松のハゼのあたり、坂田に綾氏の人が住んでいたことが霊異記で伝えられていたことを記憶している。